

「前坊」廃太子

望月郁子

一 「齋宮は十四にぞなりたまひける」

「1」源氏物語における「前坊」の登場は、

「まことや、かの六条御息所の御腹の前坊の姫君齋宮にゐたまひにしかば（『完訳日本の古典』、葵の巻「2」95頁 本文1）」

である。

「前坊」という言葉は、字面からすれば〈前の坊（東宮）〉であるが、現実には前の東宮はミカドといわれるのが普通である。源氏物語の「前坊」が前の東宮朱雀を指していないのも明白である。「前坊」という言葉を単に〈前の東宮〉とだけとるのは、言語をその実態から遊離させた、その意味で宙に浮いた解釈である。

「前坊」とは〈東宮であったが帝にならなかった方〉の呼称である。これには、東宮在位中に亡くなった場合と、東宮が

らおろされた場合とがあり得る。源氏物語は東宮空位時代から始まる。源氏物語の前坊がどちらであるかは、彼が物語中に生存していたか否かが決め手となる。

前坊登場の時点で源氏二十二歳。前坊が東宮在位中他界とすれば、姫君は源氏より年上となり、当時点で斎宮適正年齢を越えていたことになる。右の一節（本文1）は前坊の死亡時期が物語開始以後である可能性を示唆している。

物語が斎宮の年齢を明かすのは、賢木の巻の〈別れの櫛の儀〉に於いてである。

「心にくくよしある御けはひなれば、物見車多かる日なり。申の刻に、内裏に参りたまふ。御息所、御輿に乗りたまへるにつけても、父大臣の限りなき筋に思しころざしていつきたてまつりたまひしありさま変りて、末の世に内裏を見たまふにも、もののみ尽きせずあはれに思さる。十六にて故宮に参りたまひて、二十にて後れたてまつりたまふ。三十にてぞ、今日また九重を見たまひける。

そのかみを今日はかけじとしのぶれど心のうちにものぞかなしき

斎宮は十四にぞなりたまひける。いとうつくしうおはするさまを、うるはしうしたてたてまつりたまへるぞ、いとゆゆしきまで見えたまふを、帝御心動きて、別れの櫛奉りたまふほど、いとあはれにてしはたれさせたまひぬ。（賢木の巻

〔六〕155頁 本文2〕

右の「斎宮は十四にぞなりたまひける」は斎宮の実年齢の表明であるが、これは斎宮の年令を語るだけではない。斎宮の父「前坊」が十四五年以前まで生存していたことも同時に語られていると見なければならぬ。

前坊の廃太子事件そのものは語られてはいないが、斎宮の年令の明示は、廃太子事件が確実に在り、前坊は、斎宮が懐妊される当時（源氏八く九才）までは、廃太子の憂き目を背負ったまま生存していたという未知の情報を読者につきつけるものである。〈前坊廃太子〉の實在は、読者の好みや解釈を越えて、物語上の事実として作者によって語られている。

前坊の没年であるが、それが十年前と証されていると見做せそうなのは、「十六にて故宮に参りたまひて、二十にて後れ
たてまつりたまふ。三十にてぞ今日また九重を見たまひける」である。この部分は、六条の歌「そのかみを今日はかけじ
としのぶれど心のうちにものぞかなしき」にそのまま続く。「十六」から「三十」は十四年で斎宮の年齢と一致する。斎宮
の晴れの儀式に参列する御息所は、「そのかみを今日はかけじ」、つまり、今日は斎宮誕生以後だけを心にかけて、それ以前
の忌まわしい過去は意識から締め出さなければならない——そう、十六で故宮に参ってすぐに斎宮が生まれた、とすると、
故宮に先立たれたのが二十、以後今日まで十年で三十——そう思うことにしよう」と心に決めていいる。しかし儀式では、前坊
が退けられた後、東宮になった他ならぬ当人が、帝として娘の斎宮に別れの櫛を授けるのである。「そのかみ」を意識から
締め出すのは難しい。「心のうちにものぞ（アノ屈辱ガ意識ニ上ツテクルノヲ）かなしき（自分ノ力デハ抑エキレナイ）」
と苦しむ。斎宮への祝福は歌っていない。六条にとって残酷にすぎる参内であった。

また、「帝御心動きて、別れの櫛奉りたまふほど、いとあはれにしはたれさせたまひぬ」の「御心動きて」は恋慕の情と
されてきたが、それだけではあるまい。別れの櫛の儀式の最中、参列者の見守る前で帝が泣くということは、尋常とは考
えにくい。前坊の廃太子に朱雀自身の意志が関与したのでは毛頭ないにせよ、彼我の立場に心が痛み、斎宮が「いとあは
れに（不憫デタマラズ）」涙が流れたのではなかったか。⁽¹⁾

「十六」「二十」「三十」を六条の実年齢と採らず、上述のごとく解釈すれば、年立上になんら矛盾は生じない。

当該の「十六」「二十」「三十」は、従来、六条の実年齢と見られてきた。そう見るかぎり、年立上種々の矛盾を回避で
きない。にもかかわらず、矛盾を是認して、前坊東宮在位中死亡説をはじめ、廃太子否定の方向を主にいくつもの論が展
開されてきた。力作も多々在る。現在有力視されている一つに、前坊は物語の冒頭以前に亡くなったとする説があるが、
仮にそれに従えば、斎宮は生まれることが出来ないとなる。

「十六」「二十」「三十」が六条の実年齢であれば、年立上の矛盾をそうそう生じないであろう。ごく単純に考えても、当該時点で六条が「三十」であれば、物語開始時点では八歳未満で婚期に至っておらず、東宮妃に立つのは不可能である。年立上の矛盾は、「十六」「二十」「三十」が六条の実年齢でないことを如実に物語るものである。

「十六」「二十」「三十」を実年齢と見ることが出来ない以上、実年齢として展開された論は、論の筋として否定されなければならない。源氏物語に矛盾が一切ないというのではないが、読みの基本姿勢として、矛盾を生じない読みの構築がなされなければならない。上述の筆者の解釈はその見地に立っての試論である。

なお、斎宮の年齢をよりどころとする先行研究を求めたが、管見に入らなかった。

大体、廃太子の实在を正面から取り上げるのは、作者にしても抵抗があったであろう。斎宮の年齢からそれを読み取って欲しいが、ぼやかしてもおきたい。「十六」「二十」「三十」は、六条の年齢が明かされている部分と読みたくなるようにカムフラージュされているのではないか、と同時に、前坊の没年を読者に知らせるために作者が苦慮した部分であったと見る。

源氏物語は政治を表面に出しては語らないが、決して政治が無視されているのではない。政治上の重大な情報が、「斎宮は十四にぞなりたまひける」のような、そういう語り方で、読者に提供される。どこに読み落としがあるか、底の知れない作品である。

「二」廃太子が物語上の事実であるとなると、それが〈別れの櫛の儀〉の叙述で明らかにされることの意味が問われなければならないまい。

桐壺が帝位にあったのは花宴の巻までで、葵の巻から譲位後となる。賢木の巻は斎宮の伊勢下向からはじまり、続いて桐壺帝の崩御が語られる。

「…おどろおどろしきさまにもおはしまさで隠れさせたまひぬ。足を空に思ひまどふ人多かり。御位を去らせたまふといふばかりにこそあれ、世のまつりごとをしづめさせたまへることも、わが御世の同じことにておはしまいつるを、帝はいと若うおはします、祖父大臣、いと急にさがなくおはして、その御ままになりなん世を、いかならむと、上達部、殿上人みな思ひ嘆く。(「一〇」158～159頁 本文3)」

桐壺帝の死に接し、「上達部、殿上人みな」が、桐壺帝亡き後、外戚として政治の実権を握る「祖父大臣」を恐れ案じている。「上達部、殿上人みな」の「みな」に留意したい。「みな」がこうまで「思ひ嘆く」ということは、祖父大臣の過去にそれだけの暴挙、それも個人レベルではない公的問題で、誰もどうすることも出来なかった重大事件があったことを示唆する。斎宮の〈別れの櫛の儀式〉が「みな」の意識に残っていたであろう時期でもある。「斎宮は十四にぞなりたまひける」によって読者にあかされた情報は、「上達部、殿上人みな」にとっては、桐壺帝の崩御と同時に意識によみがえり、現実の不安・恐怖となっていると見てよいであろう。

つまり、桐壺帝死のすぐ前に、「斎宮は十四にぞなりたまひける」という表現で、語られなかった皇統の過去の最重大事件の存在をあかすことにより、桐壺帝亡き後の政情不安に明確な輪郭が与えられている。以後、朱雀在位時代に、桐壺帝が立太子させた東宮（冷泉）の失脚の動きが実在したことは、橋姫の巻に至って語られる。

一方、六条に焦点をしばれば、斎宮に付き添って伊勢下向し、舞台を去る寸前に、六条の心の深層の傷―源氏の冷やかさどころではない―の所在をあかしたとなる。

より重要なのは、帝桐壺にとってのこのことの重さである。

桐壺譲位後、死のすぐ前に〈前坊廃太子〉を証すのは、桐壺の政治の原点を読者に示すことによって、帝王として桐壺が意図したこと、彼の生き方の再確認を、作者が読者に暗黙のうちに求めているのではないか。

源氏物語は東宮空位時代から始まる。桐壺帝は故大納言の姫君を入内させ、「時めかし」、皇子「光」を得、「比翼連枝」と契った。これは、摂関政治花やかな当時、決して常識的なことではない。桐壺更衣の入内は、後見者なし、即ち外戚としての藤原氏の政治介入の排除という点で、藤壺・秋好の入内と通じている。桐壺更衣の入内自体が、桐壺帝の独自路線——皇統の血筋を守らなければならない、そのためには外戚としての藤原氏の政治介入を完全排除しなければならないという線に添っての最初の実践であったであろう。こういう特異な状況で物語が始められていることの直接原因ないしは動機が、「斎宮は十四にぞなりたまひける」の一文であかされているのである。

前坊廃太子の真相も、それに対する桐壺帝の対応も、物語は表立っては一切語らない。専ら、読者の理解に委ねられている。〈詮索の必要なし〉も読者の好みであり、一つの立場に違いないが、敢えて詮索すれば、前坊と六条御息所との間に男子がいない。弘徽殿に第一皇子が誕生した。「いと急にさがな」い右大臣（現祖父大臣）が、外戚への道を我がものにすべく、すかさず暴挙に出て、前坊の失脚に成功したのではなかったか。

左大臣の関わり方は不明であるが、葵上にとりついた物の怪を「この（六条御息所の）御生霊、故父大臣の御霊など言うものあり（葵の巻「一五」109頁）」について、「（六条の）父大臣が左大臣を恨んで死んだとも読める（同 脚注一九）」ととれば、前坊廃太子に左大臣も一枚かまされたか。少なくとも、左大臣が現祖父大臣を抑えることが出来なかったとだけはいえよう。

前坊は桐壺帝の「御はらから（葵の巻「一九」123頁 後出本文10）」であった。桐壺帝は、同母の弟が東宮をおろされた後、東宮空位のままにすることによって、廃太子事件に対する帝の意志と親政の姿勢を世に示し、右大臣をおさえた。桐壺更衣の入内。光誕生。第一皇子が六歳になる。その年の夏、更衣が死ぬ。「よこさまなるようにて（桐壺の巻「八」24頁）」とか「あらはにはかなくもてなされ（同「二三」33頁）」てとか語られる彼女の死は、東宮空位の状態を続ける帝に対する

弘徽殿・右大臣勢力による挑戦にほかなるまい。物語は、『長恨歌』の日本版を意図して描いたかのごとく装い、母北の方の悲しみに読者を同化させ、故人の鎮魂を歌う調べに帝の怒りも憤りも挫折感もが浄化されている。更衣死の翌年、光の身を案じてか、帝は第一皇子（七歳）を東宮とした。弘徽殿・右大臣の圧力に抗しきれなかった桐壺帝に違いないが、これは同時に右大臣勢力の懐柔でもあった。時に、前坊は生存していた。

譲位後も、「御位を去らせたまふといふばかりにこそあれ、世の政をしづめさせたまへることも、わが御世の同じことにておはしまいつるを」と、祖父大臣を牛耳ってきた桐壺帝の死は、祖父大臣勢力にとっては、待ちに待った時期到来である。

先帝の四の君（藤壺）の入内は、桐壺帝による、外戚としての藤原氏の政治介入を断ち切り、《皇統による政治支配実現の出発》となるのであるが、桐壺帝の死と同時に、それが危機にされされている。

《皇統による政治支配》の実現が、源氏物語五十四帖を一貫する底流ではないかとする見地からすれば、宿木の巻に見られる《桐壺帝の皇統の繁栄と安定》に至るための、桐壺帝による基盤固めが如何に厳しく苦しいものであったか、賢木の巻の「斎宮は十四にぞなりたまひける」は、物語り冒頭の桐壺更衣の死とあいまって、それを語っている重要な一文である。

二 源氏の六条御息所との交渉

「二一」源氏の六条との交渉は夕顔の巻、源氏十七才の夏から語られる。

「御心ざしの所には、木立、前栽などなべての所に似ず、いとどのどかに心にくく住みなしたまへり。うちとけぬ御ありさまなどの気色ことなるに、ありつる垣根思はし出でらるべくもあらずかし。つとめて、すこし寝すぐしたまひて、日

さし出づるほどに出でたまふ。(夕顔「四」115頁 本文4)

木立・前栽に抜群のセンスを示す超一流の邸宅でありながら、政界とは没交渉で人の出入りも少ない。宮中行事などの準備に追われることもない。「いとのだか」である。源氏の正妻の住む左大臣邸の雰囲気とはまるで違う別世界である。有り余る時間を「心にくく住みなし」ている。ココロニクシは、実態・実情を表面に出さず、ゆとりを感じさせる、行き届いた美しさ・見事さに対して使われる。この屋敷の実状―悲運・零落―を表面に出さないように心配りが十分に行き届いている。若い源氏は六条のくらしぶり・態度に魅せられている。「つとめて、すこし寝すぐしたまひて」は、一種の解放感に浸ってのことか。地の文は、六条邸を訪れている源氏の意識に夕顔が浮かぶはずもないとしている。

秋になる。

「六条わたりも、とけがたかりし御気色をおもむけきこえたまひて後、ひき返しなめならんはいとほしかし。されど、よそなりし御心まどひのやうに、あながちなることはなきも、いかなることにかと見えたり。女は、いとものをあまりなるまで思ししめたる御心ざまにて、齢のほども似げなく、人の漏り聞かむに、いとどかくつらき御夜離れの寝ざめ寝ざめ、思ししをるることいとさまざまなり。(同「七」119頁 本文5)」

源氏の六条に対する気持ちに変化した。そのきっかけは、「とけがたかりし御気色をおもむけきこえたまひて」である。以後、源氏は以前のように「あながちなる(ヤムニヤマレヌ)」ことがなくなったのを、地の文は「いかなることにか」という。

問題は「いかなることにか」の解釈である。思うに、オモムケはこのばあい、相手の顔を自分の方に向けさせる意で、「顔を見る」ことをいう。源氏は六条の顔に年齢が読み取れ、相手には出来ないとはっきりと知った。六条の年齢を物語は明かさない(時に源氏十七歳。対するに六条二十四歳とする従来の解釈は、賢木の巻の「十六」「二十」「三十」(前述)を

根拠とするもので、それを実年齢と見ない筆者の立場からは、従えない。

「霧のいと深き朝」の六条邸は美しい。邸を去る源氏の供をする中將のおもとを相手にしての源氏の歌

「咲く花にうつるてふ名はつつめども折らで過ぎうきけさの朝顔（119頁 本文6）」

は、六条がもはや「咲く花」ではないと源氏が知ったことを中將に解らせようとした歌である。単に中將の美しさに惹かれてのことではあるまい。この時点で六条は源氏の恋の相手ではなくなっている。

一方、六条の「ものをあまりなるまで思ししめたる御心ざま」は、よくもまあと思うほど、六条の心に源氏が染みつき、消えなくなっていることをいう。以後、六条は、源氏の足が遠退くのを悲しむ。「齡のほども似げなく」と自認するだけなおさら世間の噂を気にして悩む。相手は世の注目を集めている青年光である。物語は、女房の目を通して源氏を讃え、六条の意識を非難はしない。

右の本文5・6は、源氏と六条との交渉上、二人の意識のズレとして、見過ごせない部分である。

なお、この時点では、六条の呼称に〈御息所〉は現れない。これは、源氏を迎える六条の意識に姫君（後の斎宮）が全く入っていないことを示唆する。

以後、源氏は夕顔に熱中する。更に、空蟬・葵・兵部卿宮の姫君（紫）・藤壺・末摘花・朧月夜との交渉、源典侍との戯れは語られるが、六条については、

「おはするところは六条京極わたりにて、内裏よりなれば、少し遠き心地するに：故按察大納言の家に侍り：（若紫の巻「二五」193頁）」

「ここもかしこも（葵上・六条）うちとけぬかぎりの、気色ばみ、心深き方の御いどましさに、け近くうちとけたりし（故夕顔の）あはれに似るものなう恋しく思えたまふ（末摘花の巻「二」11頁）」

「かの紫のゆかり尋ねとりたまひては、そのうつくしみに心入れたまひて、六条わたりにだに離れまさりたまふめれば
(末摘花の巻「一二」30頁)」

と、源氏の六条との交渉が切れていないことが窺えるのみで、六条自身は葵の巻(源氏二十二歳)に至るまで登場しない。
この間五年が経過する。

「二」六条の再登場の場面を読む。

「まことや、かの六条御息所の御腹の前坊の姫君齋宮にゐたまひにしかば、大将の御心ばへもいと頼もしげなきを、幼
き御ありさまのうしろめたさにことつけて下りやしなましとかねてより思しけり。院にもかかることなむと聞こしめし
て、「故宮のいとやむごとなく思し、時めかしたまひしものを、軽々しうおしなべたるさまにもてなすながいとほしき
こと。齋宮をもこの皇女たちの列になむ思へば、いづ方につけてもおろかならざらむこそよからめ。心のすさびにまか
せてかくすきわざするは、いと世のもどき負ひぬべきことなり」など御気色あしければ、わが御心地にもげにと思ひ知
らるれば、かしこまりてさぶらひたまふ。「人のため恥がましきことなく、いづれをもなだらかにもてなして、女の恨み
な負ひそ」とのたまはするにも、けしからぬ心のおほけなさを聞こしめしつけたらむ時と恐ろしければ、かしこまりて
まかでたまひぬ。(葵の巻「二」95～96頁 本文7)」

六条が前坊の御息所であること、前坊の遺児新齋宮の母であることが読者に明かされる。六条は、齋宮の付き添いを名目
に伊勢下向を希望している。それが桐壺院の耳に入り、院が源氏を諫める——という場面である。

桐壺院に入った情報「かかることなむ」の中心は、御息所が齋宮に付き添って伊勢下向を望んでいることであろうが、
「親添ひて下りたまふ例もことになけれど(賢木の巻「二」147頁)」ということであるから、齋宮筋の人々から然るべき筋
を通して桐壺院へ伺いをたてるとなり、下向の理由が詮索されるようになったのであろう。源氏自身は六条を恋の相手でない

と判断して五年になるが、世間は知らない。六条の伊勢下向の希望は、悲運の女性のかたをもつかたちで、源氏を非難する絶好のチャンスとされた。桐壺院は、故宮・斎宮・とりわけ源氏を守ろうとして怒っている。院は「おろかなら」ぬ付き合いを源氏に要求する。院の「御気色あし」は、源氏が臣下によるゴシップの材料―よりもよって、傷つけてはならないと帝が心中深く決めていたであろう前坊・斎宮と切り離せない存在である六条に恥をかかせている―とされたことに對する憤りではないか。院に諫められて、源氏はゴシップの恐ろしさを「わが御心地にもげに（ナルホド、コウイウコトニナルノカ）」と思ひ知らるれば、かしこまりてさぶらひたま」い、藤壺との秘密がこの二の舞になるのを恐れて「かしこまりてまかでたまひぬ」であった。

「また、かく院にも聞こしめしのたまはするに、人の御名もわがためも、すぎがましういとほしきに、いとどやむごとなく心苦しき筋には思ひきこえたまへど、まだあらはれてはわざともてなしきこえたまはず。女も、似げなき御年のほどを恥づかしう思ひて心とけたまはぬ気色なれば、それにつつまたるさまにもてなして、院に聞こしめし入れ、世の中の人も知らぬなりにたるを、深うしもあらぬ御心のほどを、いみじう思ひ嘆きけり。（96～97頁 本文8）」

院の耳に入った世評を、源氏は、六条の名誉のためにも、自分自身にとっても「すぎがましく（ここでは）男女間ノ愛情問題トサレ過ギテイテ）いとほしき（目ヲソムケタイ）」と感じている。「まだあらはれてはわざともてなしきこえたまはず」は〈公然の婚儀〉の噂がたち、いつかいつかと待つ空氣が六条方にあったことを示唆する。院が「聞こしめし入れ」（承認シ）たのは六条の伊勢下向の希望であるが、院の耳に入ったとなつて、噂が噂を生み、ゴシップは〈源氏と六条との婚儀間近し〉にまで至つたということである。

世評に振り回される源氏ではない。六条の自認「似げなき御年のほど」と「心とけたまはぬ気色」をたてに、源氏はリ―ドしない姿勢で通す。六条の伊勢下向は周知のこととなつた。源氏は六条の下向を止めない。ここに至つて六条は、なお、

「深うしもあらぬ御心のほどを、いみじう思し嘆きけり」である。

この一件は、桐壺院・源氏サイドから見れば、六条の伊勢下向の意思表示が、世評をかりたて、源氏をゴシップに巻き込んだということである。但し、六条自身は、そんな自覚があるようでもなく、源氏を恨む一方である。

「二」三 源氏が交渉をもつ女性は皇統の血筋の人々が多い。朝顔（式部卿宮の姫君）・藤壺（先帝の四の君）・紫（兵部卿宮の姫君）・末摘花（常陸宮の姫君）……である。

末摘花を例に採る。源氏は末摘花と契って、

「我ならぬ人はまして見忍びてむや。わがかうて見馴れけるは、故親王のうしろめたしとたぐへおきたまひけむ魂のしるべなめり（末摘花の巻「一四」35頁 本文9）」

と自覚する。皇統の血を守らなければならないという気概がある。

齋宮にもどる。六条の回想によれば、

「故前坊の同じき御はらからといふ中にも、いみじう思ひかはしたまひて、この齋宮の御事をも、懇ろに聞こえつけさせたまひしかば、「その御代りにも、やがて見たてまつりあつかはむ」など常にのたまはせて、「やがて内裏住みしたまへ」とたびたび聞こえさせたまひしをだに、いとあるまじきことと思ひ離れにしを：（葵の巻「一九」123頁 本文10）」という。前坊他界後、桐壺帝から、故宮にかわって遺児（現齋宮）の世話をしたい、遺児には宮中で暮らしてほしいと、度々すすめられたが、六条は「いとあるまじきこと」として従わなかった。六条の意識は問題であるが、齋宮に対する桐壺院の意向は、院の言葉「齋宮をもこの皇女たちの列になむ思へば（本文7）」と一致する。

帝・東宮は内裏住みである。内裏外に住む皇統の血筋の人々を守るのは、源氏の役であったであろう。若い源氏が六条邸に出入りしはじめたのは、前坊の遺児（現齋宮）を守るための〈見舞い〉であり、おそらく父帝の指示に従ったこと

であつたであらう。

六条の伊勢下向の意思表示をきっかけに、源氏と六条との仲が世評に公然とあがつたが、院が源氏を諫めて、「いづ方（故前坊・齋宮のどちら）につけてもおろかならざらむこそよからめ（本文7）」と教え、それを受けて齋宮の母を「いとどやむごとなく心苦しき筋には思ひきこえたまへど（本文8）」でとどまる源氏であつた。外戚としての政權掌握を狙う人々に囲まれながら、桐壺帝・源氏が共有する〈皇統の血の堅持〉の意識の厳しさは、皇統でない人々には通じない。六条は皇統の血筋ではない。桐壺帝のすすめ「やがて内裏住みしたまへ（本文10）」を、六条は遺児（現齋宮）に付き添つての「内裏住み」ではなく、六条自身が桐壺帝に求められていると受けとめ、「いとあるまじきこと」として桐壺の意向に従わなかつた。同様に、源氏の六条邸訪問を、六条は、もっぱら自分への特別の好意として受け止めた。六条の意識構造が問題であるが今は触れない。源氏の訪問が途絶えがちなのを許せない六条である。

葵との衝突のきっかけとなる車争いの場面で、物語は、

「齋宮の御母御息所、もの思し乱るる慰めにもやと、忍びて出でたまへるなりけり。…（葵の巻「五」99頁）」

と六条を「齋宮の御母」と規定するが、齋宮など無視して憚らないのが葵方であることにも留意したい。以後、六条は精神不安定となり、伊勢下向に先立って神事が重なる最中、宮人たちをはらはらさせる。葵が無事に男子を出産したことに對する六条の反応は異常である。

「院をはじめたてまつりて、親王たち、上達部残るなき産養どものめづらかにいかめしきを、夜ごとに見ののしる。男にてさへおはすれば、そのほどの作法にぎははしくめでたし。

かの御息所は、かかる御ありさまを聞きたまひても、ただならず。かねてはいと危く聞こえしを、たひらかにもはたと、うち思しけり。あやしう、我にもあらぬ御心地を思しつづくるに、御衣などもただ芥子の香にしみかへりたり。あ

やささに、御ゆるするまゐり、御衣着かへなどして試みたまへど、なほ同じやうにのみあれば、わが身ながらだに疎ましく思さるるに、まして人の言ひ思はむことなど、人にのたまふべきことにもあらねば、心ひとつに思し嘆くに、いとど御心変りもまさりゆく。(「一五」114～115頁 本文11)

無事男子出産と聞いて、「たひらかにもはた」とチラリと思うとたんに、このようにエスカレートするところに、六条の心の深層の傷を読むべきではないか。―前坊が廢太子に陥られた直接の理由が、後継者となるべき男子に恵まれなかったこと、つまり六条が前坊の男子を身籠れなかったことでなかったならば、葵の上の男子出産に対して、六条がここまでエスカレートしたであろうか。六条が〈物の怪〉となるのも、前坊廢太子と切り離せないのではなからうか。

物語は、六条と葵の上とを対決させ、葵は死に、六条は伊勢下向して、共に舞台を去らせる。

六条が源氏をゴシップに巻き込もうと、物の怪となって葵を苦しめようと、故前坊のため、齋宮のために、六条を「やむごとなく心苦しき筋(本文8)」として立てるべき所は立てて通す源氏である。

最後に野宮に六条を見舞った源氏は、

「少女子があたりと思へば榊葉の香をなつかしみとめてこそ折れ(賢木の巻「二」150頁)」

と、齋宮を表面に出した挨拶をした。これが六条邸訪問の際の本来あるべきかたちの挨拶である。

群行の日の、源氏の挨拶に対する齋宮の返歌(女別当代筆)を見て源氏は、

「御年のほどよりはをかしうもおはすべきかなとただならず。…いとよう見たてまつりつべかりしいはけなき御ほどを、見ずなりぬるこそねたけれ…(賢木の巻「五」154～155頁)」

と、六条邸訪問の早い時期に、前坊の遺児(十才以前)に直接会えて当然であったのに…と、それを許されなかった無念さをかみしめる。六条邸訪問の源氏の本来の立場は、六条には全く理解されていなかった。

斎宮にまで成長した前坊の遺児は、後に冷泉に入内し、内大臣（旧頭中将）との政權掌握決定の勝負に際し、源氏の切札的役割を果たす。そこに至って、六条相手の源氏の苦しい交渉は実を結ぶ。

以上、六条物語の底流として、桐壺帝・源氏サイドに《皇統の血筋を守る》という意識が秘められていることを確認してきた。これは、同時に源氏・六条相互の意識のズレの確認でもある。

なお、登場人物相互の意識のズレの上に物語が展開されるという手法は、宇治大君物語と合い通じる。⁽²⁾

三 朝顔の源氏との交渉

六条と対比されるのは朝顔である。

朝顔は源氏に関心を寄せる女性として真っ先に世評に上げられた。

紀守の中川の家へ方違えをした源氏が母屋の様子を垣間見る。

「やをら寄りたまひて、見ゆやと思せど、ひまもなければ、しばし聞きたまふに、この近き母屋に集ひるたるなるべし、うちささめき言ふことどもを聞きたまへば、わが御上なるべし、「いといたうまめだちて、まだきにやむことなきよすが定まりたまへるこそ、さうざうしけれ」「されど、さるべき隈にはよくこそ隠れ歩きたまふなれ」などいふにも、思すことのみにかかりたまへれば、まづ胸つぶれて、かやうのついでにも、人の言ひ漏らさむを聞きつけたらむ時などおぼえたまふ。ことなることなければ、聞きさしたまひつ。式部卿宮の姫君に朝顔奉りたまひし歌などを、すこし頬ゆがめて語るも聞こゆ。（笥木の巻「二四」77頁 本文12）」

源氏が朝顔に贈った歌が、中の品の邸に仕える女房たちにまで知られている。源氏は「くつろぎがましく歌誦じがちにもあるかな、なほ見劣りはしなむかしと思す。」のみで、朝顔宛の源氏の歌が世間に流れていることを、さして気にしていな

いようである。

朝顔の父式部卿宮は桐壺院の兄弟である。後の語りであるが、

「故院（桐壺）のこの御子たち（桐壺の妹女五の宮・朝顔）を心ことにやむごとく思ひきこえたまへりしかば、（源氏は）今も親しく次々に聞こえかはしたまふめり。（朝顔の巻「二」69頁）」

ということからして、若い源氏の朝顔への交渉は、皇統の血筋の中での自然の社交としてはじめられたであろう。その歌が、朝顔の知らないうちに、女房たちの口から口へ伝えられ、ちまたに広まっている。ゴシップ化についての朝顔の苦悩も嫌悪も物語は一語も語らない。本文12のみである。

朝顔の次の登場は、六条が伊勢下向の意思表示をし、源氏がゴシップに巻き込まれた部分（本文7・8）に続いてである。

「かかることを聞きたまふにも、朝顔の姫君は、いかで人に似じと深う思せば、はかなきさまなりし御返りなどもをさをさなし。さりとて、人憎くはしたなくはもてなしたまはぬ御氣色を、君も、なほことなりと思しわたる。（葵の巻「三」

97頁）」

朝顔はゴシップの劣悪さ恐ろしさを体験している。その上で、その後の源氏との交渉を〈皇統の血筋のなかでの自然の社交〉として素直に受け流してもきたのであろう。その目でこの事件での六条を、とんでもないこと、決してあってはならないことと徹底否定し、「いかで人に似じと深う思せば」と内省する朝顔である。〈皇統の血筋を守る〉源氏をそれとして理解できているのではないか。

源氏の「なほことなり」は、世評の恐ろしさを知り、源氏をゴシップに巻き込むようなことはせず、源氏の好意は大切に
にする朝顔に、〈皇統の血〉による通じ合いを確かめ得ての感慨である。六条から受けた屈辱と苦悩を癒されもしたのである

う。

御禊の日、

「式部卿宮、棧敷にてぞ見たまひける。「いとまばゆきまでねびゆく人の容貌かな。神などは目もこそとめたまへ」とゆゆしく思したり。姫君は、年頃聞こえわたたりたまふ御心ばへの世の人に似ぬを、なのめならむにてだにあり、ましてかうしもいかでと御心とまりけり。いとど近くて見えむまでは思しよらず。」〔六〕102頁〕

朝顔は、自分の目で確かめた源氏の素晴らしさに感激しながら、「いとど近くて見えむまでは思しよらず」と、距離を置いた付き合いを可とした。自己を現実的に客体化できる姫君である。その意味で自分のセルフアイデンティティを確立できない六条とは対照的な存在である。

朝顔の源氏との交渉は、そのまま続く（省略）。

八年経過。父式部卿宮の死により斎院を辞任。故父宮の桃園の宮に女五の宮（桐壺帝妹）と住む。五の宮の見舞いにかこつけて、源氏訪問。うっすらと積もった雪が月に光る夜、源氏求婚、朝顔拒否。

「世の人の口さがなさを思し知りにしかば、かつはさぶらふ人にもうちとけたまはず、いたう御心づかひしたまひつつ、やうやう御行ひをのみしたまふ。（朝顔の巻「七」83～84頁）」

で通す。朝顔を「さぶらふ人にもうちとけたまはず、いたう御心づかひしたまひつつ」と徹底して孤立化させたのは、若い時（本文12）の体験である。その意味で、朝顔は女房社会のゴシップとたたかった女性であった。

積もった雪が月に光るまたの夜、紫の上相手の源氏の回想。故藤壺を偲び、ついで、

「前斎院の御心ばへは、またさまことにぞみゆる。さうざうしきに、何となくとも聞こえあはせ、我も心づかひせらるべきあたり、ただこの一ところや、世に残りたまへらむ」とのたまふ。（「九」87頁）」

朝顔が故藤壺回顧に連続して源氏の意識に上るのは、桐壺帝の遺志を継いで皇統の血筋（東宮冷泉）を守った女性が藤壺であり、皇統の血筋を守る若き源氏のよき理解者が朝顔であったことを、それとは語らずに語っているのではないか。

四 作者の書きたかったものとその方法

以上、女房の目を通して描かれている〈前坊一家〉の物語り―関連部分を含む―に秘められている源氏物語の底流を、桐壺帝・源氏サイドから読もうとした試論である。

前坊の廃太子は物語上の事実である。桐壺帝が志向したのは、摂関政治に対する怒りと不信に端を発する《皇統による政治支配》に至るための体制づくりであり、《皇統の血筋を守る》ことであった。それが帝王四代に涉って引き継がれ、宿木の巻に描かれている〈桐壺帝の皇統の繁栄と安定〉に至ったと筆者は見る⁽³⁾。

道長が政権を握っていた当時、作者の、執筆意図は、帝の意図に託して描く他無かったであろう。

そうした上で、作者は、政治は女房の関知できないことと一線を画し、宮廷社会の様々な人間模様を、女房の目―基本的には摂関家賛美の目―を通して描いた。政治は底に秘めて表には表わさない。

桐壺更衣の死を日本版『長恨歌』のかたちに託して語り、源氏の冷やかさに苦しむ貴婦人六条に、あるいは葵の死を悲しむ左大臣夫妻に読者を同化させ、…と、読者の意識をそんなふうにしておいて、六条が伊勢下向して物語の舞台を去る寸前に「斎宮は十四にぞなりたまひける」と語る。この短い文の重要さは一言も語られない。

「斎宮は十四にぞなりたまひける」だけではない。桐壺帝の前坊・斎宮に対する意向、あるいは女五の宮・朝顔に対する意向も、事の終り近くに至って語られる。若い源氏が女性、例えば六条との交渉を開始するに先立って、父帝の意向・方針が語られるということはない。それらは、作者の摂関批判ともども、あくまで底流に秘められている。

源氏物語では、人間関係展開の中心に和歌が配されており、和歌を融合し、自然と人事とが同化する文章は実に美しい。淋しさも悲しみも怒りも自然のなかに浄化される。政治上の重大事を重大事と読者に感じさせないで、さり気なくかすめて書くのにこれ以上適した文体はなかったであろう。

〔注〕

- (1) この時の朱雀の様子を、齋宮は「いにしへ思し出づるに、いとなまめききよらにて、いみじう泣きたまひし御さまを、そこはかとなくあはれと見たてまつりたまひし御幼心も、ただ今のこととおぼゆるに、……（絵合「二」）」と、鮮明に記憶している。
- (2) 望月郁子「大君の死と中の君の結婚―皇統の血の堅持―」（二松学舎大学人文論叢第六十一輯一九九八年十月）
- (3) 注2の文献「二4」（帝王四代目に至っての天皇親政の安定）

〔参考文献〕

保立道久『平安王朝』（岩波書店 一九九六年二月）

〔付記〕 この小論は一九九九年五月八日、中古文学会春季大会で口頭発表したものである。